

京都大学附属図書館蔵『御用帳雑記』ほか 公卿平松家記録にみえる絵師の顔ぶれ

福田 道宏

はじめに

本稿で検討するのは現在、京都大学附属図書館が所蔵する「平松文庫」中の『御用帳』・『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雑記』¹⁾である。この「平松文庫」はもともと江戸時代に興された公卿平松家伝来の記録類などからなる。うち、前掲の史料五件は平松家六代目の平松時章（一七五四～一八二八）の年代の記録類で、表題に「御用」「御役中」などをつくことから明らかなとおり、時章が仙洞御所の院伝奏や、禁裏御所の議奏の任にあった期間に書き留められた公用の記録である。

具体的に言くと、時章の、①院伝奏在任中（寛政十二年（一八〇〇）から文化十一年（一八一四）まで）、②議奏在任中（文化十一年から同十四年まで）、③院伝奏再任中（文化十四年から

文政三年（一八二〇）まで）の期間、時章がかかわった職務が記されている。

時章の許へはさまざまな案件が持ち込まれる。宮廷内外の争論が持ち込まれ、院や天皇の威光を背景に問題を解決しようとするものであったり、調停を期待するものであったりもする。こうした場合、双方の言い分が書き留められ、どのような対応をしたのかも記される。争論でなくとも、何らかの願いの筋があつて来る者もある。また、公卿、地下官人や出入りの者も慶弔、縁組・出産・死去などさまざまな届を出す。院伝奏や議奏の私邸は受付窓口であり、雑掌が対応する場合も多く、その名も多数見える。とは言え、もちろん時章個人への依頼ではなく、院伝奏・議奏としての時章への依頼、つまり、時章を通じて、①の期間であれば後桜町院（仙洞御所）、②であれば光格天皇（禁裏御所）、③では光格院（仙洞御所）に取り次いでもらおうというものである。願いがかなえられた場合、願い出た者は再

び、時章を通じて御礼に参上もする。

ここでは、そうしたなかから、絵師に焦点を合わせ検討することにする。まず第一章では、本史料の性格を明らかにするため、まずは時章を中心に公卿平松家と、史料それぞれについて、その内容をもとに検討する。つぎに第二章「記録に現われる宮廷絵師たち」では、絵師に焦点を合わせ、その用向きから、1 絵の御用、2 叙任、3 届、に分類して見ていくことにする。最後に第三章「御遺物について」では、本史料ならではの記事として、時章が関わった後桜町院崩御に伴う、仙洞御所の御遺物の下賜・配分について見ておく。第二章まではほぼ、時章と同時代の絵師の動向だが、御遺物の場合、後桜町院在世中のゆかりの品であり、必ずしも同時代のものとは限らないが、今日でも皇室ゆかりの寺院などではしばしば「〇〇天皇御下賜」といった寺伝の由緒が書かれていたりする、その具体相を見ておくことにする。

一、平松家と同家伝来の記録類について

平松家の祖は時章から遡ること六代、江戸時代初期の平松時庸（一五九九～一六五四）である。『公卿人名大事典』⁽²⁾によれば、桓武平氏の西洞院時慶（一五五二～一六三九）の二男で、分家して平松を称した。なお、時庸には西洞院家を継いだ兄以外に

弟が二人おり、それぞれ長谷・交野家を興した。

時庸は従二位（薨去の日に権中納言推任）⁽³⁾までのぼり、その子時量（一六二七～一七〇四）も正二位権中納言、新院伝奏、⁽⁴⁾その子従二位権中納言時方（一六五一～一七一〇）と続く。時方の弟行豊は石井家を興し、末弟時香は大叔父にあたる大膳大夫交野時貞の養子となった。なお、石井行豊が新しく一家を立て得たのは、平松家出身で東福門院付きの女官となり、石井局と称した行子のおかげという。『公卿人名大事典』の石井家の項には「権中納言時量の娘行子が東福門院（第百八代後水尾天皇の皇后）の女臈となり、石井局と号した。この石井を院宣にて弟の行豊が氏姓とし一家を創立した」とある。⁽⁵⁾一方、『京都市姓氏歴史人物大辞典』⁽⁶⁾の「石井 いしい・いらい」の項を見ると、その二番目に同家があり、

家号は西洞院時慶の娘行子が東福門院の上臈として石井局を称していたが、一六五四（承応三）年一家をたつべき院宣が下され、甥の行豊を養子とした。のち行豊が一六六六（寛文六）年に石井を姓としたという。

とあり、行子を二代遡って平松家初代の時庸のきょうだい、時量のおばとするので、「甥」は言うとすれば「又甥」か。確かに、時量の娘では年代的に合わないように思う。院宣が下されたという承応三年、時量は前年に従四位下に叙されたばかりで、従三位に叙されて公卿に列するのは三年後のことである。⁽⁷⁾『公卿補

『任』で行豊が初登場の元禄元年（一六八八）の従三位以前の経歴をみても、そうした経緯は記されず、委細は明らかにしがた⁽⁸⁾い。ただし、後年の平松家の基盤は、こうした縁故も一因なのかもしれない。

さて、時方の子が非参議時春（一六九三～一七五四）、時春の子が権中納言時行（一七一四～一七八六）と続き、時行の子が時章である。本稿で扱う『御用帳』・『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雑記』は時章の代にあたるため、少し詳しくみておく。『公卿人名大事典』の時章の項⁽⁹⁾には、

江戸時代の人、権大納言。宝暦四（一七五四）年七月一日生く文政一一（一八二八）年九月一九日没。七五才。権中納言平松時行の次男。兄に時升（従四位下・侍従・少納言、宝暦七、一〇、二四没、一八才）、弟に長谷時息・万里小路文房がいる。宝暦八（一七五八）年叙爵。同一年元服して甲斐権介に任ぜられる。同二年従五位上に進み、同一三年甲斐権守に任ぜられる。明和元（一七六四）年少納言・侍従に任ぜられる。同三年正五位下、同七年従四位下、安永三（一七七四）年従四位上に進み、同四年彈正大弼、同五年右兵衛権佐に任ぜられる。同七年正四位下、天明二（一七八二）年従三位、同八年正三位に進み、寛政八（一七九六）年右兵衛督に任ぜられ、更に同一〇年参議

に任ぜられる。同一二年踏歌外弁となり、更に享和二（一八〇二）年権大納言に任ぜられる。文化元（一八〇四）年に辞す。同四年正二位に進み、更に同一〇年権中納言に任ぜられるも辞す。子に時亨（従五位上・侍従・少納言、寛政六、一二、七没。一四才）・時門がいる。

とある（引用中算用数字を漢数字に改めた）。一見して明らかにように任権中納言と任権大納言を逆にするのは誤植だろう。平松家では初めて、そしてこの後も含め歴代で唯一、権大納言までのぼった人物である。ここにはあらわれないが、時章は議奏などの要職を務め、その職務にかかわる記録が「平松文庫」には多数含まれている。本稿で扱うのもその一部である。

では、俎上に載せる記録類をもう少し詳しく見ておく。まず、『御用帳』は一冊で七十丁。表紙には、

平松家

寛政十二庚申年

御用帳

十一月十五日 御役付

とある。冒頭には、

寛政十二庚申年

十一月十五日

一、御参院、申刻

今日 院伝奏御役被為蒙 仰候ニ付、為御礼御参、左

之通、

禁裏御所・中宮御所・鷹司閔白様

二条左府様当時院執事・勧修寺様武家伝奏

千種様武家伝奏・梅小路様院伝奏御同役

但議奏方・評定方江者不及御行向御近例也、

という。この日、院参した時章は院伝奏を仰せ付けられた。

国立公文書館所蔵が所蔵する、外記方地下官人を統括した大外記押小路家歴代の日記には、それぞれの年初の冊の冒頭に、

天皇はじめ閔白や議奏、武家伝奏など、文書発給における実務を遂行する上で関わりの深い朝廷の人員を一覧にしてある冊がある。たとえば、この直前、寛政十年、押小路師資の日記『大

外記師資記』を見ると、

上皇御諱
兼仁

天齡二十八 御徳丑未

仙洞トモ
智子

桜町院皇女 御歳五十九 同 辰戌

中宮ヨシ
欣子

後桃園院皇女 同 二十 同 丑未

鷹司閔白政熙公

議奏

今出川亜相実種卿 広橋前亜相伊光卿

鷺尾前亜相隆建卿 甘露寺前亜相篤長卿

六条前黄門有庸卿

伝奏武家兼帯

勧修寺前亜相経逸卿

千種前黄門有政卿

院伝奏

梅小路黄門定福卿

西洞院左兵衛督信庸卿

両貫首

中山頭右中将忠頼朝臣

柳原頭左中弁均光朝臣

といった具合である。ここでいう「上皇」はいわゆる上皇ではなく、今上を指し、光格天皇であり、師資の子師武は「主上」などと記す。⁽¹¹⁾ 年によって、ここに「五位職事」・「蔵人」や「評定」といった役も載ることがあり、また、院伝奏の記載がない年もある。もちろん、仙洞が不在であれば院伝奏はない。

当該期で押小路師資・師武・師贊の日記をもとに時章を追ってみると、寛政十二年の『大外記師武記』では院伝奏に前任の西洞院信庸の名があり、翌年「平松宰相時章卿」に替わる。享和二年（一八〇二）はそもそもこうした記載がなく、享和三年は記載はあるが院伝奏が載らない。享和四年（一八〇四、文化元年）以降、『大外記師武記』・『大外記師贊記』で記載のない文化五年を除き、同九年まで「前黄門」、もしくは「前権中納言」として院伝奏に時章の名がある。その後、文化十・十二年と文政以降はそもそも記されず、文化十三・十四年には議奏として

「前重相」「前大納言」として時章が挙がる。なお、時章の父時行も議奏を勤めたのち明和八年（一七七二）から安永三年（一七七四）まで院伝奏として載っている。¹³ほかの役も見てみると、朝廷中枢のこうした役は、概ね決まった家で父子代々受け継がれることが多い。

さて、本題の『御用帳』だが、本人が記す通常の日記ではない。それはさきに引用した冒頭部分で平松時章が仙洞御所に出仕することを「御参院」と記し、ほかの箇所でも時章に敬語を用いることから明らかである。また、筆跡はたびたび変わる。つまり、平松家の雑掌など家来が交替で書き留めた公用記録で、このあと触れる『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雑記』についても同様である。既述のように、朝廷中枢の役に就く家筋は比較的固定しており、時章の代の職務を記しておくことは直接的に子孫の参考となると期待され、家にとって重要であり、主従協働のもと膨大な記録が残されたのだろう。

内容としては、日記のように日を追って、一つ書きで、参院・退出の時刻や、その日の来訪者・来翰と用向き、その対応などを記し、朝廷内外の公卿・地下官人・非藏人、所司代や京都町奉行、禁裏附、門跡、各地の大名、寺社などから仙洞御所（後桜町院）への時節の伺い、届や御礼、さまざまに触れの順達などについて書き留められる。

なお、本冊は年末まで期間が短く、十二月二十八日まで記したあと、二十九丁表に「職事方御剪紙留」、四十八丁表に「諸届并願書類留」、六十三丁表に「仮服并混穢届留」、六十七丁表に「御廻文并触留」と一行で大書して表紙とし、裏は白紙とし次の丁から前半の書式とは異なった、文書の写しが合綴され、収められている。一冊の中に或る意味で、日を追った日次記の部分と、そこに現われた、時章の手を経た文書などを写した部分とに分けられるのである。後述するように、この後半の写しの部分はのちに、独立して別冊となるが、本冊前半と後半は補完し合う。たとえば、前半の十一月二十九日条には、

一、梅小路様方 御使

右者伝奏方雑掌中より之触書御順達、御触書留帳ニ写、

十二月七日条には、

一、梅小路様方 御使

右者御廻文御順達、則御触帳ニ写留、千種様へ御返却、とあり、後半の「御廻文并触留」にそれらが載る。

「御廻文并触留」冒頭は、幕府から十一月付で達せられた二朱判（銀貨）通用に関する触れに、伝奏雑掌から十一月二十八日付の口上覚がついたものである。宛所は梅小路前中納言・平松宰相の「御家来中」で、末尾に「追而御廻覧後、千種家へ御返し可被成候、以上」とある。梅小路定福は院伝奏の同役、千種有政は武家伝奏である。続いて十二月七日付で有政・経逸（勸修

寺) 兩名から梅小路前中納言・平松右衛門督宛に出された口状が写される。来る九日から十日の「和歌てにをは」伝授、十四日から十七日まで内侍所臨時神楽の二度の神事中、宮中への僧尼の参入について、院祇候の者への伝達を指示する。

つぎに『御用帳雑記』と『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』だが、いずれも『御用帳』の翌年、寛政十三年(享和元年)から始まる。それぞれ第一冊の表紙を掲げると、『御用帳雑記』は、

寛政十三辛酉年

二月、享和ト改元

御用帳雑記

從正月
至十二月 平松家

とあり、題名に「雑記」が加わるのみで、基本的には『御用帳』前半を踏襲している。以後、同題で三十冊が京都大学附属図書館に伝わる。当初一年一冊だったが、のちに一年が「春夏」・「秋冬」の二分冊になる。『職事方御剪紙留』第一冊表紙は、

寛政十三辛酉年

二月、享和ト改元

職事方御剪紙留

平松家

『諸届書并願書類留』第一冊表紙は、

寛政十三辛酉年

二月、享和ト改元

諸届書并願書類留

平松家

であり、内容はさきの『御用帳』後半、文書類の写しの部分が独立したものである。以後、どちらも十七冊が伝わる。対応関係はつぎの『議奏御役中雑記』と併せ、本稿末の表1のとおり。表から明らかなように、『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』には中断があり、『御用帳雑記』第二十二冊が文化十一年七月でいったん終わり、同十四年二月の第二十三冊から再開して文政三年の第三十冊まで続く。後二者は第十三冊と第十四冊の間に中断がある。

中断の理由は明白である。先述のとおり、記録は時章の院伝奏仰せ付けに始まるが、その、後桜町院が崩御して院伝奏を免ぜられるからである。『御用帳雑記』を見ると第二十一冊、閏十一月二日巳刻に院参、亥半刻に退出したが、すぐまた評定方から「御異例御勝不被遊」から「只今」参仕するよう言われて子刻に院参、その晩退出はせず、翌三日条に、

一、仙洞御所

今晩亥刻崩 御之旨御披露被

仰出候也、

とある。同日晩も退出できず、四日子刻になって退出した。

以後、「後院」・「旧院」とよばれる主不在の仙洞御所で、「御遺物」を朝廷内外に贈るなど、残務処理にあたることになる。

そして、第二十二冊、同十一年五月十五日条には、

一、御参 内午刻、御退出申刻也、

右者今日被為 召候ニ付御参

内被遊候処、御両役御列座ニ而議 奏豊岡大藏卿様左之

通被 仰渡、

長々御勤役御出精之段、

御満足 思召候、今日御勤役被免、

夫方御場所替り如前御列座ニ而左之通被仰渡、

近習小番御免之列ニ被加之由、

右ニ付御礼被 仰上、

御対面被為有候、「以下略」

と院伝奏を免ぜられ、併せて「近習小番」、つまり宿直も含む禁裏小番を免除されると仰せ渡された。この日、旧院御所の口向役人も退散、翌日に難髪出家した女官たちの名も六月七日条に見える。ただし、残務はまだあったようで飛び飛びに七月二十三日まで御残道具の整理などの記事がある。

つぎに『御用帳雑記』の再開だが、第二十三冊の冒頭は、

文化十四丑年

二月四日

一、御参 内午刻、御退出酉刻、

右者今日御両役様方御参集ニ付御参

内之処、今度 御讓位後、

院伝 奏御内意被為蒙 仰候也、

右ニ付御退出懸、御礼御廻勤左之通、「以下略」

とあり、時章は再び院伝奏を仰せ付けられる。これは、このとし三月、光格天皇が東宮恵仁親王（仁孝天皇）に讓位し、光格院が仙洞御所に移徙するためである。三月二十二日条には、

廿二日 從今日月番

今日就 御讓位御受禪

一、御参 内丑刻、御供 鬘斗目麻上下、

夫方 院御所為御出向寅刻迄御参

院、寅刻前御退出也、

と初めての参仕を記す。その後、文政三年まで院伝奏を勤めた。第三十冊の末尾、十二月二十三日条には、

一、御参 院巳刻也、御退出未刻也、

右者被為 召、御参 院之処、院伝奏御役御辞退之段、是迄毎々被 召留、御残念被 思召候得共、及簞年候儀、今度者被 聞食、御免被 仰出候、猶此後茂折々御機嫌御伺参可被為有旨、関白様被 仰渡候ニ付、御礼被仰上、御退之処、御役所前御廊下ニおゐて御同役日野大納言様被 仰渡候者、永々御勤勞有之候付、御役料年々是迄之通被下候旨被 仰渡、御一紙御渡被成候、左之通、

院伝奏平松前大納言、先院中御役久々勤仕、其後、御在位中議奏御役勤仕、

御讓位之節、被召連院伝奏御役勤仕、久々無懈怠、

出精勤仕之処、及老年候故、因願御役被 免候、

因有勤勞為

御褒賞以厚

思召、是迄之通、三拾石自

此御所御藏、年々被下候旨被

仰出候事、

右之通被仰渡、非常御前被 免候旨、是亦被仰渡、其

後、御対面被為在、於

御前黄色紗御召御小直衣袴御拝領被為蒙^{〔虫損〕}候、

右ニ付夫々御礼被仰上、其後御退出、被改御衣冠為御

礼御廻勤左之通、〔以下略〕

とある。光格院の信任がいかに厚かったかがわかる。申刻に御礼に参上した禁裏御所では当番議奏甘露寺国長から、文化十一年と同様、近習小番御免の列に加えられる旨、仰せ渡され、諸方を回って帰殿したのは亥半刻であった。

つぎに『議奏御役中雜記』について簡潔に触れておく。四冊が伝わる。すでに見たように、時章は後桜町院崩御後、院伝奏は免ぜられたが、議奏となり、光格天皇の退位で再び院伝奏になった。つまり、院伝奏在任中の『御用帳雜記』などの中断期間とはほぼ重なって、題名からも一目わかとおり議奏在任中の『議奏御役中雜記』が記され、おかげで二十年余りに及ぶ長期の記録となっているのである。これも第一冊の表紙には、

文化十一甲戌年

議奏御役中雜記

從六月
至十二月 平松家

とある。冒頭は六月十日の記事で、前日、武家伝奏六条・山科両名からの御文で、この日午刻参内するように言われて参内したところ、議奏に任じられて、御礼回りをしたところから始まる。終わりは第四冊、同十四年三月十六日条の末尾に「一、今日議奏小番御免被 仰出候也」との一行があるが、ひと月半前には、院伝奏になることが御内意として伝えられている。内容は、もちろん、禁裏御所と仙洞御所で出入りする者も違えば、用向きも異なるが、ここではひとまず措く。一見して明らかに、書式としては、『御用帳雜記』を踏襲することである。

さて、以上、ここで取り上げる記録類は、朝廷の中枢にあつて、廷内の出来事について比較的、客観性が高い情報を知り得た者が記させたもので、なおかつ即時性があり重要である。また、二十年余と長期にわたって各資料がそれぞれ補完し合っており、併せて検討することで、廷内の実態がわかるという意味でも貴重である。

なお、平松家に伝来した「平松文庫」がどのようにで経緯で京都大学に入ることになったものか不明だが、『御用帳』・『職事方御剪紙留』などの一丁目「京都帝国大学図書之印」とともに捺されたスタンプに「大正3. 11. 5」などがある。「平松文

「庫」の典籍類などでは、日は若干前後するが、一九一四年（大正三）十一月までは同じである。日にちの違いは、納められた日の差か、整理された日の差かは不明である。購入か寄贈かはわからないが、この時期にまとめて収蔵したのだろう。散逸しなかったことは非常に幸いなことと言わなければならない。

二、記録に現われる宮廷絵師たち

前章で見たように、『御用帳』・『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雑記』は、平松時章の、①院伝奏在任中（寛政十二年（一八〇〇）から文化十一年（一八一四）まで）、②議奏在任中（文化十一年から同十四年まで）、③院伝奏再任中（文化十四年から文政三年（一八二〇）まで）の職務に関する記録である。

本章ではそうしたなかから、絵師に焦点を合わせ、その用向きから、1 絵の御用、2 叙任、3 届、に分類して見ていくことにする。一方、絵師に限ってみても、記される頻度が最も高いのは、時候・行事のあいさつ、地下官人としての職務などである。ただし、ここでは紙数の都合もあり、別稿に譲って、絵師の営みが浮かび上がる、さきの1から3を検討することにする。

1 絵の御用

当然ながら、絵師を絵師たらしめているのは絵を描くという行為においてである。宮廷での絵の御用の獲得は、絵師として非常に重要であった。ただし、直接的な絵の御用は、ここで扱う記録類には、日常的にはそう多く登場しない。また、絵の御用を仰せ付けられたことへの御礼に参上しても、具体的な絵の仕様や内容までは職務の範囲外のため記されない。ただし、いつ、どのような絵師が御用を獲得していたのか、俯瞰的にその一端が垣間見えるという意味では興味深い。まずは、絵の御用に関して年ごとに見ていくことにする。

享和元年（一八〇一）

絵の御用で最も早く現われるのは『御用帳雑記』第一冊、享和元年五月六日条である。

一、参上 原在明

右者一昨日於 仙洞御所御褒美頂戴御礼、

この日、原在明が一昨四日、仙洞御所から御褒美を頂戴した御礼に参上した。在明は原在中の次男だが、縫殿寮史生伊勢家の養子となった地下官人でもあり、当時正七位下若狭目であった。

ここでひとつ問題となるのが、「在明」と名乗る点である。在明の生涯については、すでに別稿で詳述したので、必要な限りで簡潔に述べると、『地下家伝¹⁵』によれば、在明の初名は「近

義」で、享和四年に在明と改名したことが載り、『大外記師武記』でも確認できる。また、寛政十二年従六位下に叙されるが、その際、『大外記師武記』には「原若狭目平近義」と書かれており、すでに伊勢を原と改めてはいるが、宮廷での名は在明でなく近義である。⁽¹⁶⁾

可能性として考えられるとすれば、御褒美が官人としてではなく、絵師としての在明に与えられたので、絵師としての名を名乗っているということである。当該箇所には若狭目・縫殿寮史生などの官職が記されないことも裏付けとなる。ただし、三十年ほど遡るが、絵師山本守礼が亀岡主水と称していた時代に、絵の御用を仰せ付けられて、兵庫寮下司鉦師としての宮廷での正式な名「守貞」ではなく、絵師としての名「守礼」で落款したことが問題となった例もある。⁽¹⁷⁾ほかの絵師の御用御礼がないことから、単発の小規模な御用だったのだろうが、弱冠二十四歳で絵師として認められていたことは特記されてよい。

文化元年（一八〇四）

続いて『御用帳雑記』第四冊、八月一日・六日条に、

〔二日〕

一、参上

吉田元椿

右者 仙洞御所御巻物之御画被仰付候御礼、

〔六日〕

一、参上

仙洞御所御用御絵

吉田元椿

無滞奉調進候旨御届

申上候、

と、吉田元椿が仙洞御所から「巻物之御画」を仰せ付けられ、その御礼と、滞りなく調進出来たとの届けが記録される。吉田元陳の子孫が連綿と宮廷絵師として存続していた様子がわかる。

文化二年（一八〇五）

『御用帳雑記』第五冊、八月十日条には、仙洞御所の能舞台の鏡板の御用を勝山琢眼が仰せ付けられて、御礼に参上する。

一、参上

勝山琢眼

右者 仙洞御所御内々之御能舞台鏡板画御用被仰付御礼申上候也、

これが修復なのか、新規造営なのかは不明。一般に武家の式楽という認識が根強い能だが、宮廷でも行われ、『御用帳雑記』にも能楽師が散見される。

文化三年（一八〇六）

『御用帳雑記』第六冊、二月二日条には、ふたたび元椿が登場する。

一、参上

吉田元椿

右者従 仙洞御所御扇面御用被仰付御礼

申上候也、

仙洞御所から扇面の絵を仰せ付けられたというのが詳細は不明。
翌三月二十四日条に、画所預土佐家についての記事がある。

一、参上

土佐左近将監所勞ニ付名代
長谷白映

右者今般御月扇・常式御用被仰付并、先規之通拾人御扶持方等も被下置、冥加ニ相叶難有仕合奉存候、右御礼奉申上候、

一、参上

土佐土佐守所勞ニ付名代
恒枝金吾

右者今般病氣ニ付御月扇・常式御用并拾人御扶持方等も以後、左近将監江先規之通被下置候様願之通被仰付、難有奉存候、右御礼奉申上候、

左近将監・土佐守はそれぞれ、本家の光時と、その叔父で分家の光貞である。二人とも所労を理由に名代を遣わしているが、『地下家伝』⁽¹⁸⁾によれば、光貞は六十九歳の高齢で、このとし四月六日に没するので、すでに重篤だったものか。内容は、これまで光貞が勤めてきた御月扇・常式御用と十人扶持を、光貞の病気のため、これまでどおり光時に下し置かれるようお願い出て、認められたことへの御礼である。名代の長谷白映はこのあと約十年後の光格天皇から仁孝天皇への譲位にともなう御用で登場する福知白映と音が通じるが、同一人かわからない。恒枝金吾は、同一人物か不明ながら、寛政度禁裏御所造営に光貞門人と

して出願して採用された恒枝専蔵がおり、金吾は『京の絵師は百花繚乱―『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇―』に恒枝元章として載る。⁽¹⁹⁾

ついでに触れておくと、既述のように光貞はほどなく没し、四月七日条には、光時と、土佐上総介（上野介の誤り。光禄、光時の子）・備後介（光孚、光貞の子）からの届書が提出され、五月十七日条に光時と光禄、二十七日条に光孚の忌明届が現われる。

文化四年（一八〇七）

光貞亡き後、光孚は分家を相続して、土佐守に任じられる。

『御用帳雑記』第九冊、十月二十四日条には、

一、参上

土佐土佐守

右ハ此度 洞中御用被仰付候御礼申上候也、
とあり、仙洞御所の御用を勤めるようになったようである。

文化五年（一八〇八）

『御用帳雑記』第十冊には仙洞御所の殿舎の障壁画に関する記事もある。まず、二月十三日条に、

一、参上 醒花亭御襖御絵被
仰付候御礼、 鶴沢探泉

とあり、翌十四日条には、

一、同「参上」 醒花亭御絵被仰候 呉月溪

御礼、

と鶴沢探泉とともに、四条派の祖呉春が醒花亭の絵を仰せ付けられ、御礼に参上している。

文化六年（一八〇九）

『御用帳雑記』第十二冊、三月三日条に、

一、参上 仙洞御所方御扇面之絵被 円山主水

仰付候御礼、 波々伯部右京

と、円山応挙の長男応瑞が扇面の絵を波々伯部右京とともに仰せ付けられている。右京は寛政度禁裏御所造営で吉田元陳弟子として出願したが採用はされなかった絵師である。

続いて翌々四日、

一、参上 仙洞御所御扇面画被 嶋田主計頭

仰付候御礼、

とあり、「嶋田田主計頭」、つまり嶋田元直が同じく扇面を仰せ付けられる。平松家の記録では必ず「嶋田」の字を当てているが、一般に「嶋田」と書き、『地下家伝』²⁰でも同様。引用中を除き、本稿でも「嶋田」と表記する。応挙高弟と言われ、代々、仙洞御所の院庁官を勤める古い家で、平松家の記録では絵の御用以外に頻出する。

『御用帳雑記』第十三冊では、

一、参上 土佐左近将監

右者御絵御用無滞調進候御礼、且前段御褒美拝領之御礼申上候也、

と十月十八日条に光時が絵の御用を滞りなく勤め終えた御礼と御褒美を拝領したことへの御礼が載る。この直後、「仙洞御賀」恐悦のあいさつが多数載り、このとし後桜町院は数え七十歳であることから、これも一連のものかもしれない。

文化七年（一八一〇）

翌年は絵の御用は一件である。すなわち、最初に登場した左明のもので『御用帳雑記』第十四冊、一月二十五日条に、

一、同「参上」 原在明

右者 仙洞御所御画御用被仰付候御礼也、

とある。どのような御用かはこれも窺い知ることができない。

文化十年（一八一三）

文化八年・九年には、見たところ絵の御用は現れない。十年になって、在明の父在中が登場する。『御用帳雑記』第二十冊、三月六日条に、

一、参上 仙洞御所御画御用被 仰付候御礼申上候也、 原在中

とあり、これも具体的な内容は不明。こうしてみると、さきに

文化三年に元椿が、同六年に応瑞・右京・元直が扇面を仰せ付けられたのも三月であり、恒例なのかもしれない。

このとし後桜町院が崩御し、仙洞御所は主不在の「旧院」となるので、翌十一年にかけて『御用帳雑記』にも当然のことながら絵の御用の記事はない。しかし、時章は同年に議奏となるので、今度は光格天皇の禁裏御所に参仕することになる。結論を先に述べると『議奏御役中雑記』には絵の御用の記事が多数記される。それは、もちろん、仙洞御所と禁裏御所の違いというところであろうが、それ以上に、絵の御用が多くあった時期ということであろう。

文化十一年（一八一四）

『議奏御役中雑記』第一冊はすでに見たように六月十日から書き始められるが、それから二か月も経ない七月二十九日、最初の絵の御用の記事がある。同日条には、

一、参上 今般

海北将監

小御所御修復ニ付御絵御用
奉蒙 仰付御礼申上候也、

とあり、寛政度造宮の小御所の修復だが、寛政度には海北斎之亮が小御所東廂に朝賀之図を描いており、これはその絵の繕いだらう。桃山時代を代表する絵師海北友松に始まる海北家も代々連綿と御所の御用を勤めた家である。

文化十二年（一八一五）

翌年にも海北将監の記事がある。『議奏御役中雑記』第二冊の七月九日条に、

一、参上 仙洞御所御修復・中宮御所 海北将監

御造^{宋カ}□ニ付、六条様へ願書差出

候ニ付、右御届、且宜御沙汰之儀

奉願候旨也、

とあり、仙洞御所の修復と中宮御所の造宮について、願書を「六条様」に提出したので宜しく御沙汰をお願いします、という。「六条様」は当時、武家伝奏の六条有庸。後桜町院崩御後、空主の御所だが、光格天皇も四十五歳、東宮も十六歳であり、讓位が具体的な日程にのぼってきたため修復が行われる。ただし、絵師の御用が本格化するのには翌年になってからである。ほかの絵師もすでに願書の提出を始めていたものか。

文化十三年（一八一六）

『議奏御役中雑記』四冊で絵の御用の記事が最も多いのが第三冊である。五月から年末にかけて多数記録される。まず、五月二十八日条に、

一、参上 中宮御所御造立 三谷鼎

御絵御用被 仰付候

御礼申上候也、

とあり、以下、断続的に、六月一日・二日・四日条に、

〔二日〕

一、参上

今度、中宮御所

御造立御絵御用被

仰付候御礼申上候也、

原在中
在明

〔三日〕

一、参上

今度、

中宮御所御造立

御絵御用被

仰付候御礼申上候也、

岸越前介

円山主水

同 応震

岡本豊長

東洋

八田古秀

上田耕夫

長沢芦洲

吉村蘭洲

土岐濟美

鶴沢探泉

同 式部

土佐々々守

土佐伯耆守

村上東洲

山本探測

〔四日〕

一、参上

中宮新殿 法橋了琢所勞_二付名代

御絵御用被 仰付候御礼也、

木村大貳

狩野縫殿助

と六月に入つて四日間で二十名、五月の三谷鼎と合わせて二十一名の絵師が御礼に参上している。詳細はここからは分からないが、顔ぶれから寛政度禁裏御所造営で新規参入した絵師とその子孫も多数見られ、宮廷絵師の裾野が安政度より前にすでに拡大していたことが見て取れる。

以後、同月十九日条には、

一、参上

清涼殿御絵繕

土佐伯耆守

御用被 仰付候御礼、

土佐々々守

との記事が見え、中宮御殿と併行して、清涼殿の修復も行われていたらしい。土佐守はさきに見たとおり分家の光孚であり、伯耆守は本家の光時である。

さらに仙洞御所の記事も出てくる。九月十六日条の原在中を皮切りに十七日・十八日・二十日条と続く。

〔十六日〕

一、参上

仙洞御所御絵御用被

原 在中

仰付候御礼申上候也、

〔十七日〕

一、参上

仙洞御所御絵御用

比喜多宇隆

被 仰付御礼申上候也、

三谷 鼎
海北将監

〔十八日〕

一、吉城元陵 狩野縫殿助

狩野左近 八田古秀 木村了琢

村上松堂 円山主水 柴田義董

土佐土佐守 鶴沢探泉 山口素綱

同筑前介 岸越前介

右者今般、仙洞御所御絵御用被

仰付候御礼申上候也、

〔二十日〕

一、参上 仙洞御所御絵御用被

仰付候御礼申上候也、

土佐伯耆守

さきの中宮御殿と重なっている者もいるが、十八名を数え、約半数の八名はここから現われるので、ここまで三十名近くの絵師が動員されている。

同月二十八日条には、中宮御殿の追加下命もあったものか、

一、参上 中宮御殿御絵并 狩野縫殿助門人

後院朝餉之御間御繕 景山洞玉

被 仰付候御礼、

とある。この洞玉は、狩野縫殿助、つまりこのとし没する狩野永俊の門人であるので、実子が永俊の養子となって永岳となり、

自らも狩野永章と名乗った初代の洞玉だろう。⁽²¹⁾

「後院」の朝餉之御間の繕いも命じられていて、以後、「後院」の記事が多数ある。後桜町院の「後院」と、さきに十八名が御礼に参上した仙洞御所の御用が同じか、その関係は未詳だが、寛政度と安政度の禁裏御所造営の端境期であるこの時期にあったのは、比較的大規模な御用で、これにめぐり会えた絵師は幸運だったと言えよう。

翌二十九日条、十月十三日・十四日・十六日条にも、後院の御用が現われる。

〔九月二十九日〕

一、参上 後院御絵御用被

仰付候御礼申上候、

東寅

〔十月十三日〕

一、参上 後院御絵御用

被 仰付候御礼申上候、

円山主水

森周峯

高井豊泉

〔十四日〕

一、土佐土佐守

桃田栄雲

江村春鳳

景山洞玉

原在中

狩野因幡目

本寫元常

竹内由右衛門

竹内渡

波々伯部龍眠

右之面々、後院御杉戸御繕被 仰付候御礼申上候也、

所旁二付代由右衛門相勤

〔十六日〕

一、同〔参上〕 後院御杉戸御繕被 鶴沢探泉

仰付候御礼申上候也、 同 式部

御用はまだまだ続き、後院の杉戸絵の繕いに続き、再び禁裏御所の御涼所の繕いがある。十月十九日条に、

〔十九日〕

一、参上 御涼所御絵御繕 田山主水

被 仰付候御礼、 秀喬真

長沢蘆洲

とある。十一月に入っても、新たな仰せ付けがあったものとみえ、六日条に、

一、参上 御新殿御杉戸御絵御用 狩野因幡目

并 後院御杉戸御繕被

仰付候御礼申上候也、

一、同 御新殿御上段御絵御用 武田素駿

後院小御所并御杉戸御

繕被 仰付候御礼申上候也、

とある。十二月には、恐らくここまでで御用を拜命した絵師が御礼に参上したものとみえ、八日条には四十三名、十日条に勝山琢眼・琢文父子、十五日条に三名、二十五日条に二名が記される。

〔八日〕

一、院中御絵御用被 仰付候御礼申上候人数、左之通、

渡辺周蔵 長沢蘆洲 原在中 原在明

原在親 横山華山 岡本豊彦 田山主水

同 応震 同 応春 土佐豊前守 福知白暎

恒枝金吾 石田悠亭 高井豊泉 秀喬真

森徹山 西邨中和 狩野山月 合川珉和

八田古秀 呉景文 江村春鳳 紀広成

山本探測 吉村孝敬 山岡主計 三谷鼎

竹内由右衛門 村井陸奥介 峯鼎 望月玉川

狩野左近 狩野因幡目 岸越前介 同筑前介

巨勢遠江 嶋田主計頭 岡本大輔 河村文鳳

同 崎鳳 山跡鶴嶺 西村南亭

〔十日〕

一、参上 院中御絵御用 勝山琢眼

被 仰付候御礼、 同 琢文

〔十五日〕

一、参上 御絵御用被 土岐濟美

仰付候御礼、 多村拳秀

〔二十五日〕 狩野因幡目

一、参上 御絵御用被 海北将監

仰付候御礼申上候也、 宮脇有景

総勢五十名で、なかには事績の知られていない絵師も含まれるが、この直前に死去した鶴沢探泉や狩野永俊を加えれば、当該期の宮廷絵師の顔ぶれとしては、これでは網羅していると言つてよいだろう。

文化十四年（一八一七）

先述のとおり、『議奏御役中雜記』第四冊は三月までと短く、丁数も第三冊などの四分の一度である。しかし、前年からの続きで絵の御用が現われる。まず、年始早々一月五日条に、

一、参上 御屏風御下画

巨勢遠江

拝□伺之義不行届

之段恐入候宜奉願候、

とある。何下絵の提出について何らかの不行届きがあったよう
で詫びを入れているが、巨勢遠江は三月二日条にはほかの二名
の絵師とともに御褒美を拝領している。

一、同「参上」 御屏風御褒美

西邨中和

頂戴之御礼申上候也、

高井豊泉

巨勢遠江

このあと時章が院伝奏に転じて、再び『御用帳雜記』に戻るが、
このとしも、翌文政元年も絵の御用の記事はない。

文政二年（一八一七）

『御用帳雜記』第二十七冊、一月二十三日条に応瑞と松村景文
の名が現われる。

一、参上 御末広御用御絵被

円山主水

仰付候御礼申上候也、

呉 景文

とあり、続いて現われるのは九月である。この時期、時章は八
月十三日から関東参向中で「御留守中」と断つたうえで、一段
下げて細字で記してあるが、その九月一日条に、

一、参上 御月扇并御絵

土佐伯耆守所旁名代
土佐土佐守

御用之義願之通、俾

左近将監江被

伴左近将監名代
狩野縫殿助

仰付候御礼申上候也、

とある。土佐本家の光時が、息子光禄への御月扇と御用仰せ付
けを願つて、願の通り仰せ付けられたための御礼参上だが、光
時は所労のため名代として分家の光孚を、光禄の名代には永岳
を立てている。従兄にあたる分家の光孚はともかく、永岳に名
代を頼んでいるのは、宮廷画壇の絵師たちの関係性として目を
引く。さらに、十四日条には、

一、参上

土佐伯耆守所旁二付名代
土佐土佐守

口上扣

今般病氣三付御月扇・常式御用并十人扶持方等も以

後左近将監へ先規之通被下候様願之通被 仰付、
冥加相叶難有仕合奉存候、右御礼奉申上候、

一、同

土佐左近将監所勞ニ付名代

恒枝金吾

右同様之御礼申上候也、

とある。『地下家伝』によれば、光時はこのあと九月十七日に没して⁽²²⁾おり、光貞が本家の光時に御用や扶持を返したときと同じく、臨終を前に息子への御用相続を済ませたのだろう。翌文政三年も絵の御用の記事はない。つぎに絵師の叙任について見ていく。

2 叙任

平松家の当該期の記録には叙任に関する記事も多数含まれている。そこには畿内の有力社寺の神職・僧侶も多いが、遠方の社寺も散見され、興味深い。絵師について見ると、院庁官島田家、画所預土佐両家の叙任が当然、多数書き留められる。彼らと、地下官人でもある絵師たちの叙任は『地下家伝』などから確認できるため、ここでは割愛し、それ以外を取り上げる。なお、宮廷絵師ではないが、地方在住の絵師の叙任についても、形の上であれ宮廷絵師の門人となることが多いため、見てみることにする。

(1) 宮廷絵師

宮廷絵師の叙任では、『職事方御剪紙留』第六冊に、

文化三年二月一日 宣

画所預土佐守光貞朝臣門人

京住画師

法橋訥言

辞位

職事 明光

と、田中訥言の法橋辞位がある。

『御用帳雜記』第七冊、同年十二月十九日条には、山村可溪なる絵師の法橋勅許御礼の記事がある。

一、同「参上」 山村可溪法橋蒙

吉田元椿

勅許候御礼、

一、同「参上」 法橋 勅許候御礼、

山村可溪

これについては、『職事方御剪紙留』第六冊に、
文化三年十二月十九日 宣

〔略〕

故法眼元陳門人

京住画師

可溪

已上、叙法橋

職事 重能

資愛

とある。この可溪については京都在住の絵師ではあるが、宮廷御用を勤めた実績は管見の限り見当たらない。

『議奏御役中雑記』第二冊、文化十二年二月一日条には、

一、参上 法眼 宣下之御礼 宮脇有景

申上候也、

一、同 門人有景法眼 土佐伯耆守

宣下之御礼申上候也、

と宮脇有景の叙法眼があり、同じく第三冊、同十三年十二月二十二日条には、

一、参上 法橋宣下 鶴沢探春

御礼申上候也、

と、探春の叙法橋が記される。これに先立ち、同冊、十月十八日条に、

一、参上 伴式部儀難髪改名 鶴沢探泉

願之通被 仰出候御礼、

右同様御礼申上候也、 同 探春

と改名の記事があり、同時に叙法橋にむけて剃髪している。これはすでに探泉の死期をさとして、探春への家督譲渡を急いだため、同月二十三日条には、探泉の死去届が出され、叙法橋

の直前、恐らく忌明け後であろう十二月十六日条には家督仰せ付けの御礼に参上している。

(2) 地方在住の絵師

つぎに地方絵師について見ておこう。『職事方御剪紙留』第二冊に、

享和二年三月廿七日 宣

〔略〕

法眼探泉門人

加賀国大聖寺住画師

宗景

以上、叙法橋

職事 資董

国長

資愛

建房

とある。『彩々鶴沢派から応挙まで』によれば、大聖寺の紺屋の生まれで、鶴沢探索・探泉に学んで加賀前田家の御抱えとなったといい、このとし法橋に叙され、文政四年(一八二一)には法眼に叙されたという⁽²³⁾。続いて、同じ冊には、

享和二年十月五日 宣

〔略〕

故法眼元陳門人

薩摩国

鹿嶋住画師

洞龍

已上、叙法橋

職事 資董

国長

資愛

建房

と、薩摩の絵師も登場する。『薩藩画人伝備考』所載の谷山洞龍⁽²⁴⁾か。同書によれば、「名ハ美清、初メ探樂ト号ス、画ヲ狩野洞春ニ学ブ、後チ画道ノ功ニ因リ大進法橋ニ叙セラレ」(読点は引用者が補った)とあり、文化八年十一月二十八日に没したというが、「大進」は京職・大膳職・修理職などの三等官で、もちろんそのような官に任じられてはいないだろう。京都大学文学部閲覧室所蔵『画工任法橋法眼年月留』にも現われる。⁽²⁵⁾

第十二冊には広島島の絵師が現われる。

文化九年十月廿三日 宣

〔略〕

法眼探泉門人

備後国府中住画師

索準

叙法橋

職事 隆純

経則

とあるが、これは片山索準斎で、菅茶山らが編纂した『福山志料』の挿絵を描いたという。⁽²⁶⁾ 同じ中国地方でも備後府中のように福山藩領ならば絵師がいても不思議はないが、次の一例は絵師の住地として興味深い。第十四冊に、

文化十四年五月四日 宣

〔略〕

故法眼探泉門人

石見国銀山住画師

蘆葉

叙法橋

職事 俊明

経則

光成

とあり、石見銀山に住む絵師が法橋に叙されているのである。

銀山でどのような絵師の仕事があったか不明であり、今後の課題としたい。

第十六冊には、

文政二年八月十九日 宣

〔略〕

画所預土佐守光孚門人

肥後国熊本住画師

良恭

以上、叙法橋

職事 俊明

経則

光成

顕孝

共福

とあり、梶山良恭だろう。『細川藩御用絵師・矢野派』⁽²⁷⁾によれば、

良恭は雲谷派の流れを汲む細川家の御用絵師矢野良勝の弟子で養子となったが後に離縁されたといい、その離縁の際の逸話として、「あるとき法橋の印を刻しているのを見た良勝が、自分より先に法橋になったことを怒って離別したといい、良恭は離別後上京して法橋に叙任し、一家をおこしたと伝えられる」という。脈絡がやや取りづらいが、地方在住の絵師にとつての叙法橋の意味が垣間見える点は興味深い。『御用帳雑記』第二十八冊、文政二年八月三十日条には、

一、参上 門人法橋 宣下之御礼

土佐土佐守

一、同 今般法橋蒙

土佐土佐守門人

宣旨候御礼申上候也、

矢野良恭

と土佐光孚と同道の御礼も記される。

その雲谷派だが、第十七冊には、毛利家御絵師雲谷等隆の叙法橋が載る。

文政三年五月八日 宣

〔略〕

長門国萩住画師

法橋等徽男

等隆

〔略〕

以上、叙法橋

職事 俊明

経則

光成

顕孝

共福

地方の絵師とは言え、雲谷家は近世前期の承応度禁裏御所造営にも参加しており、さらに寛政度では等村が出願（不採用）、また、代々の宗家・分家の当主はしばしば法橋に叙され、法眼に叙される者もあったので、ほかと同列には扱うべきでないかもしれない。⁽²⁸⁾

当時、僧位を得ようとすれば、出費は決して少なくない。まして、遠方からとなれば、ますますのことであろう。単なる酔狂ではないはずである。

3 届

『御用帳雑記』第二冊、享和二年二月三十日条には、土佐光貞から、娘の死去届が出され、続いて三月九日条に忌明けの御届の記事がある。

〔二月三十日〕

一、参上

土佐備後介

右者土佐守娘、昨廿九日死去届書指出候也、

〔三月九日〕

一、参上

土佐土佐守名代
土佐備後介

右者今日忌明、所勞ニ付以名代御届申上候也、

当然のことながら、『地下家伝』などに女性の死は出て来ない。

また、家督を継ぐ者以外も同様である。『諸届書并願書類留』第

四冊、文化元年六月二十七日条には、

一、私二男昨夜死去仕候、依之、

十日 仮

三十日 服

右之通着服仕候、尤混穢不仕候、仍御届申上候、以上、

文化元年七月二日

嶋田主計頭

一、私弟昨夜死去仕候、依之、

二十日 仮

九十日 服

右之通着服仕候、尤混穢不仕候、仍御届申上候、以上、

文化元年七月二日

嶋田内匠助

とある。島田元直の次男については未詳。

『御用帳雑記』第九冊、文化四年七月十一日条には、

一、参上 名跡願之通

正栄名跡

被仰付候御礼、

狩野伊織

と狩野正栄(匡信)の離縁を受け、先代至信の弟子という伊織が名跡を継ぐことを許された御礼に参上する。⁽²⁹⁾

珍しい例としては、文政三年九月二十五日、光孚の次の届が『御用帳雑記』第三十冊にある。

一、参上

土佐土佐守

右者湯治、願之通被 仰出候御礼申上候也、

といい、翌十月二十一日条には、

一、参上

先達而湯治御暇相願、

土佐土佐守

罷越候処、相済帰京

仕候旨申上候也、

と帰京を届け出ている。土佐家は画所預という職にあり、京都を離れるに際しては暇願が必要だったのだろう。

三、御遺物について

ここまでは、概ね記録と同時代の絵師の記事を見てきたが、

時章ならではの記事として、後桜町院の御遺物について見ておく。この時代、天皇・上皇などが崩ずると、その御所の多数の調度が「御遺物」、つまり遺愛品として下賜された。そうした品々は現在でもしばしば京都などの寺院で見かけるものだが、いつ、どのような経緯で制作され、どのように下賜されたか未詳のものも多い。また、寺院伝来のものは寺伝などから由緒がわかる場合もあるが、いまは由緒が失われてしまったものも多いはずである。

後桜町院崩御ののち、長年にわたり院伝奏として院に仕えた時章および平松家にも御遺物の拝領があり、ほかにも「分配」があった。『御用帳雑記』第二十二冊、四月十四日条を引用する。

一、今日 旧院御遺物御拝領之御品左之通、

- 一、紫御小掛 一領
 - 一、御掛物 福祿寿星明僧
逸然画隠元賛 一幅
 - 一、唐桑七宝形御卓 一箱
 - 一、金銀孔雀御香炉 一箱
 - 一、唐桑御紋蒔絵御脇息 面別衣張 一箱
 - 一、源氏十二月御屏風 吉田元陳画 一双
- 此外御残之御品、御文匣入、数々御拝領、
- 若殿様御拝領左之通、
- 一、波鶴蒔絵御硯筥 一箱
 - 一、御遠眼鏡 一箱

此外御文匣入御品御拝領
御分配御拝領物左之通、

- 一、御茵 縹緗錦
東京錦 二枚
- 一、御帖 縹緗
高麗 二帖
- 一、御表筵 一枚
- 一、御簾 大小 廿六枚
- 一、棒鞘新御剣 伊勢守祐平 一振
- 一、御沓 入柳宮 一箱
- 一、白木唐櫃 一合 初共
- 一、灯台 金皿一枚
打敷一帖 一基
- 一、銅油指 一箱
- 一、桐御香炉 四方拝御料 二箇 箱入
- 一、御箏箱 白木 一
- 一、菊御紋蒔絵大火鉢 火箸 一箱
- 一、黒塗炭取 一
- 一、鐵火箸 一對 箱入
- 一、桐木本檐子 一
- 一、朱硯 一箱
- 一、葉菊御紋図無文匣 一
- 一、同一番文匣
- 一、同文箱
- 一、同目錄文匣

一、同色紙文匣

一、新土御茶壺

一箱薩摩杉

一、置戸棚

一

一、鞍掛

一

若殿様江御分配御拝領之品々左之通、

一、御屏風片シ草木花

一、御簾

三枚

以上、

絵師の名を明記するのは時章が拝領した吉田元陳の「源氏十二月御屏風」と逸然の軸「福祿寿星」一幅だが、「若殿様」と記された時門が「御分配」で拝領した「草木花」の屏風などの絵もある。

ほかへの御遺物と分配では、江戸の将軍家や、京都所司代に贈られた御遺物にも絵がある。将軍には「御賀月次御屏風」文化六年「一双」が挙がる。「文化六年」とあることから、同年の「仙洞の「源氏八景御絵巻」も絵があつたのだろうが、筆者不明。また、所司代酒井讃岐守（忠進、若狭小浜藩³⁰）に贈られた「御掛物」稲嶺筆「三幅対」は画題不明だが、土方稲嶺だろう。京都に住み、晩年、鳥取に帰ったものとされ、京都とのゆかりはあるが、宮廷御用の事績は知られていない。後桜町院御所にあつたのだとすれば、その事績として重要である。

おわりに

ここまで、もともと公卿平松家に伝来し、一九一四年に収蔵されて以来、現在まで京都大学附属図書館が所蔵する「平松文庫」中の『御用帳』・『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雜記』という、寛政十二年から文政三年まで二十年間にわたって記され続けた五件の史料をもとに、そこに現われる絵師たちについて検討してきた。ただし、史料の性格上、絵師の絵師らしい仕事、絵の御用はあまり登場しない。平松時章が、院伝奏や議奏のかたわら、御用絵の調進などにかかわる臨時職の奉行などに任命されていれば、絵の仕様や画題などについても記され、何いの過程を明らかにできたかもしれないが、ここで取り上げた史料にそれを望むことは出来ない。ここからわかる絵の御用は、筆者はだれか、いつそれを仰せ付けられ（或いは調進し）て、御礼に來たかという、顔ぶれが中心である。しかし、宮廷絵師の通時的な把握のためにはその顔ぶれも重要であろう。また、叙任や各種の届も絵と直接かわるものではないが、絵師の営みの把握のうえで欠かして得ないものである。

一方で、本稿で取り上げた史料は、絵師以外にも宮廷内外、近世における中央と地方の問題を考えるうえで多数の興味深い

内容を含んでいる。今回は、紙数の都合で割愛せざるを得ないが、そうした問題についてもいずれ考えてみようと思う。

- (1) いずれも京都大学附属図書館ホームページから閲覧できる。
『御用帳』 (<http://mkulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/RB00005942>)
『御用帳雑記』 (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h070/h070cont.html>)
『職事方御剪紙留』 (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h076/h076cont.html>)
『諸届書并願書類留』 (<http://mkulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/RB00005951>)
『議奏御役中雑記』 (<http://mkulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/RB00005924>)
- (2) 野島寿三郎編『公卿人名大事典』一九九四年七月、日外アソシエーツ、六七九～六八〇頁。
- (3) 『公卿補任』第三篇、一九六五年七月、吉川弘文館、六三五頁。
- (4) 『公卿補任』第四篇、一九六五年十月、吉川弘文館、七〇・七六・七九頁（天和三年・天和四年・貞享二年（二六八三・八四・八五）条）。
- (5) 前掲注2『公卿人名大事典』八六頁。
- (6) 『京都市姓氏歴史人物大辞典』一九九七年九月、角川書店、一一五頁。
- (7) 前掲注3『公卿補任』第三篇、六四八頁。
- (8) 前掲注4『公卿補任』第四篇、九六頁。
- (9) 前掲注2『公卿人名大事典』六八〇頁。
- (10) 国立公文書館蔵『大外記師資記』（古〇〇八—〇二七〇）三七冊のうち第三七冊。
- (11) 国立公文書館蔵『大外記師武記』（古〇〇九—〇二七一）。
- (12) 国立公文書館蔵『大外記師賛記』（古〇一〇—〇二七三）。
- (13) 前掲注10『大外記師資記』。
- (14) 拙稿「文化四年、原在明の江戸下向と享和・文化年間、原家の動向」『京都造形芸術大学紀要GENESIS』一七号、二〇一三年十一月。
- (15) 正宗敦夫編輯校訂『地下家伝』一九六八年、自治日報社、一三六～七頁。
- (16) 前掲注11『大外記師武記』三四・三九。
- (17) 拙稿「山本守礼事績考—地下官人をめざす絵師たちの研究序説—」『京都造形芸術大学紀要GENESIS』一五号、二〇一一年十一月。
- (18) 前掲注15『地下家伝』一〇八八～九頁。
- (19) 京都文化博物館『京の絵師は百花繚乱—『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇—』一九九八年十月、京都文化博物館、二八四頁。
- (20) 前掲注15『地下家伝』八九二頁。
- (21) 野口剛「絵師解説」『近世京都の狩野派展』二〇〇四年九月、京都文化博物館、二一六頁。
- (22) 前掲注15『地下家伝』一〇八七頁。
- (23) 『彩々鶴沢派から応挙まで』二〇一〇年四月、兵庫県立歴史博物館、一五五頁。
- (24) 井上良吉編『薩藩画人伝備考』一九一五年十一月序、発行所不明、早稲田大学中央図書館蔵、七三頁。
- (25) 野口剛「絵師の僧位叙任をめぐる断章—『画工任法橋法眼年月留』の紹介をかねて—」『朱雀』第一三集、二〇〇一年、京都文化博物館。
- (26) 『菅茶山ゆかりの絵画展—絵画でたどる菅茶山の交友—』二〇〇九年十月、菅茶山記念館。一九一〇年（明治四三）刊行の『福山志料』には「守規」の落款のある図が多数掲載される。拙稿「近世の文化財調査『福山志料』挿絵と法橋片山守規」『Grandeひろ

- しま」一二号、二〇一六年三月、四～五頁。
- (27) 『細川藩御用絵師・矢野派』一九九六年十月、熊本県立美術館、一〇五～六頁。
- (28) 拙稿「大名絵師の家格戦略——雲谷家を中心に——」『豊饒の日本美術——小林忠先生古稀記念論集』二〇一二年三月、竹林舎、三三〇～五頁。
- (29) 拙稿「狩野正栄事績考」『京都造形芸術大学紀要 GENESIS』一三号、二〇〇八年十一月、京都造形芸術大学、一二九～一四六頁。
- (30) 前掲注6『京都市歴史姓氏大事典』三三五頁。

表 1 『御用帳』・『御用帳雑記』・『職事方御剪紙留』・『諸届書并願書類留』・『議奏御役中雑記』 対応表

元号	西暦	冊次			
寛政12年	1800	御用帳（職事方御剪紙留、諸届并願書類留、仮服并混穢届留、御廻文并触留）			
寛政13年	1801	御用帳雑記 1	職事方御剪紙留 1	諸届書并願書類留 1	
享和 2 年	1802	御用帳雑記 2	職事方御剪紙留 2	諸届書并願書類留 2	
享和 3 年	1803	御用帳雑記 3	職事方御剪紙留 3	諸届書并願書類留 3	
享和 4 年	1804	御用帳雑記 4	職事方御剪紙留 4	諸届書并願書類留 4	
文化 2 年	1805	御用帳雑記 5	職事方御剪紙留 5	諸届書并願書類留 5	
文化 3 年	1806	御用帳雑記 6 春夏	職事方御剪紙留 6	諸届書并願書類留 6	
		御用帳雑記 7 秋冬			
文化 4 年	1807	御用帳雑記 8 春夏	職事方御剪紙留 7	諸届書并願書類留 7	
		御用帳雑記 9 秋冬			
文化 5 年	1808	御用帳雑記10春夏	職事方御剪紙留 8	諸届書并願書類留 8	
		御用帳雑記11秋冬			
文化 6 年	1809	御用帳雑記12春夏	職事方御剪紙留 9	諸届書并願書類留 9	
		御用帳雑記13秋冬			
文化 7 年	1810	御用帳雑記14春夏	職事方御剪紙留10	諸届書并願書類留10	
		御用帳雑記15秋冬			
文化 8 年	1811	御用帳雑記16春夏	職事方御剪紙留11	諸届書并願書類留11	
		御用帳雑記17秋冬			
文化 9 年	1812	御用帳雑記18春夏	職事方御剪紙留12	諸届書并願書類留12	
		御用帳雑記19秋冬			
文化10年	1813	御用帳雑記20春夏	職事方御剪紙留13	諸届書并願書類留13	
		御用帳雑記21秋冬			
文化11年	1814	御用帳雑記22 （～7月）			議奏御役中雑記 1 （6月～）
文化12年	1815				議奏御役中雑記 2
文化13年	1816				議奏御役中雑記 3
文化14年	1817	御用帳雑記23春夏（2月～）	職事方御剪紙留14	諸届書并願書類留14	議奏御役中雑記 4 （～3月）
		御用帳雑記24秋冬			
文化15年	1818	御用帳雑記25春夏	職事方御剪紙留15	諸届書并願書類留15	
		御用帳雑記26秋冬			
文政 2 年	1819	御用帳雑記27春夏	職事方御剪紙留16	諸届書并願書類留16	
		御用帳雑記28秋冬			
文政 3 年	1820	御用帳雑記29春夏	職事方御剪紙留17	諸届書并願書類留17	
		御用帳雑記30秋冬			

Line-up of the Imperial Court Painters in the Documents of Lord Hiramatsu's
Family from the Collection of Kyoto University Library

FUKUDA Michihiro

Abstract

Imperial court painters refer to the painters engaged in the works at the imperial court, regardless of their title or if they received regular payments of salary. The imperial court in the early modern era provided various occasions, on an irregular basis, for the painters. Special and the large scale of works are the *shohekiga* paintings, or the paintings on the walls, sliding panels, and folding-screens with which decorated inside of the *gosho*, the imperial palace and royal residences during the reconstructions. Among the small scale of works, not on a regular basis, the painters were engaged with the constructions or restorations of the *Sento-gosho* the Palace for the retired Emperor in the change of emperors, and *Togugosho*, the Crown Prince's Palace with the accession of the crown prince. Quite a few painters were formally assigned, but when the occasional works became larger in scale, more painters were mobilized. However, no special attention has been paid to the regularity of the works or the line-up of the painters engaged in them.

This essay aims to develop a chronological understanding of the imperial court painters, and to identify the painters appearing in the imperial court records. This research has significance as it is the first attempt to consider five kinds of records in sixty-nine volumes (the Collection of Kyoto University Library) over the twenty years when Lord HIRAMATSU *Tokiaki* (1754~1828) occupied the positions of *Indenso* (1800~1814, 1817~1820) the secretary of the emperor in charge of relaying messages to and from the retired emperor and *Giso* (1814~1817). First, for analytical research, this essay considers the nature of the records owned by the HIRAMATSU Family and investigates the painters from the points of (1) paintings works, (2) the titles from the imperial court, and (3) various submitted documents, in chronological order. While Lord *Tokiaki* was *indenso*, he was engaged in the distribution of mementoes of the passed emperor, and after the demise of the retired emperor *Gosakuramachi*, the records describe in detail to whom each of the cherished properties including paintings were sent and are regarded as one of the most significant sources on the origin and history of the properties in some temples to which they are believed to have been granted by the emperor.